
けんぷファー ~ 白き巫女と黒き巫女 ~

黒巫女カズハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けんぷファー〜白き巫女と黒き巫女〜

【Nコード】

N1708T

【作者名】

黒巫女カズハ

【あらすじ】

数ある退魔の中でも有名な野々村家の巫女の娘が、ひよんなことからケンプファーの戦いに巻き込まれてしまい、さらに巫女同士の戦いもあるというハチャメチャストーリー。

キャラクター紹介（前書き）

まずはメインとなるキャラ紹介です。

キャラクター紹介

野々村 美雪

性別・女

年齢・16

武器・通常時は聖刀光桜（セイトウコウザクラ）退魔札一式。ケンプファアのときは魔法が追加される。

容姿・黒髪セミロングの女の子（ケンプファア変身時、緑髪になる）備考・退魔巫女の名門である野々村本家の一人。まだ退魔巫女としての実力は成長段階だが野々村本家…そして吹雪の妹ということで期待されている・・・が本人は自分に自信がないためこの退魔の仕事は向いていないと思っている。退魔の仕事を終えたときに拾った人形のせいでケンぷファアの一件に巻き込まれてしまうことに。

野々村 吹雪

性別・女

年齢・17

武器・氷刀氷桜（ヒョウトウヒョウザクラ）退魔札一式とオリジナル退魔札。

容姿・黒髪ロングの女の子

備考・退魔巫女の名門である野々村本家の一人。両親の全盛期を抜けば現在の野々村家ではトップの実力。そのため仲間や党首からは一番信用されている。妹の美雪を護るという気持ちは高く過保護といてもいいかもしれない。けんぷファアとかいうわけのわからないものに巻き込まれた妹を護るため、吹雪は今日もいく（笑）

プロローグ『仕事』

私の名前は野々村美雪、星鐵学院の二年生。

なんだけどたった今私は普通の高校生には程遠いような戦いをしています。

刀を振るったりして戦っているんだからまさに普通ではないのです…本当はしたくないんだけどなあ。

今戦っているのは下級霊体…人に取り付き惑わす悪霊。

「……………光桜…これでとどめ！」

私は光を纏った刀を振るい霊を切り裂く。

「ッ！！？」

言葉も話せないような下級霊体は消えていった。

「なんとかやれた…でもやはり私には向いてないよね…」

この流れをみていればわかると思います…。

私は一応退魔巫女で悪き者を祓う者…仕事ですから仕方なく頑張っています。

え？刀を振り回すのを見られたらまずいんじゃないのかって？

まあそこら辺は一般的には秘密なので見られないように隠札で境界を張って上手く隠しています。

「ん?…」

仕事をおえて一息ついた私の足元に奇妙なキツネのぬいぐるみが落ちていました。

お腹から腸のようなものが出ている人形…私が刀を振るったときに切ってしまったのかな…?

首の当たりから血がでてるようなデザインだし…。

「少し気味が悪いデザインだけどかわいそうな気がするし切ってしまったとこくらい直しておこうかな」

と思い私は持つて帰ることにしました。

まさか…これを持つて帰ったせいで…ただでさえ普通の日常から離れているような私をさらに日常からつき離すような非現実的な事に巻き込まれる事になるとは予想外だったので…。

第一話『帰還　そして私とお姉ちゃん』

野々村神社の隣にある大きめな家が私の家。

自分で大きいとかいうのも自慢みたいでアレだけど大きいのだから仕方ない。

私の家系は昔から退魔の仕事で稼いでいたかららしい。

表向きはただの神社だけだね。

「ただいま」

「美雪ー。おつかえり」

私が玄関を開けると吹雪お姉ちゃんがやってきた。

「とりあえず依頼されたものは片付けたよ」

「さっすが私の妹。ってあのくらいなら楽勝かな？ところでその気味が悪いぬいぐるみは？それになんか妙な力を感じるような感じないような…」

さすがに指摘された…なんか目立つしなあ…色んな意味で…でも妙な力って何だろう？

私は何も感じないけど…

「え？コレ？仕事中に巻き添って切ってしまったみたいだから可哀

相だし直そうかなーっ」と

私はぬいぐるみの切ってしまった首の辺りを優しく撫でた。

「何か妙な気配がするぬいぐるみだし捨てておけばいいのに…でも邪気とは違うし平気か。それにその優しさが美雪のいいところだからいいんだけどさ〜」

とか言いながらお姉ちゃんは私の後ろから抱き着いてきた。

「もう。お姉ちゃんはいつもくっついて来るんだから…」

と言いながらも不思議と嫌な感じはしないのは私が甘えん坊だからなのだろうか。

「いいじゃん別に。姉妹の愛情表現よ。仕事終わったんだしそれよりさっさとお風呂行ってご飯食べて寝よ寝よ。一応私達は高校生でもあるんだし…」

「ん、そうだね…疲れたしお風呂行ってこようかな」

「私は先にお風呂済んでるし行ってらっしゃい〜」

と私とお姉ちゃんは一旦別れ、そのあと夕飯とぬいぐるみの裁縫…他にやることを済ませた私は…さすがに疲れていたのかぐっすりと眠った。

第一話『帰還 そして私とお姉ちゃん』（後書き）

今回も短いですが本編に入るにつれだんだん長くしていこうと思います。

ゆっくり更新ですが・・・まあのんびりやっていきたいと思っています。

第二話『朝の大騒動』

ジリリリリ！！バシッ！

「…うるさい…んむう…」

目覚ましが鳴り響いたので叩くように止めた。

二度寝したい気持ちだが起きる…が眠い。

布団を片付けてつと…ん？

不意にそこで右手に違和感を覚えた。

「あれ？何コレ？黒い腕輪？と、とれないし。てか繋ぎ目がない…」

引っ張つても取れる気配はない。

「繋ぎ目なんてないわ。とれないようになってるのよ」

私以外に誰もいない…ハズなのに、どこからともなく女の声が聞こえた。

「誰!？」

私はすぐに警戒するように刀を取ろうと…

「こっちこっち」

「え…？」

あの人形が喋っていた。

何故？どうして？そんなことが？ぬいぐるみって喋るんだっけ？そもそも動いてる…？

「とりあえず落ち着いて。いい？よく聞くのよ？貴女は選ばれたのよ。戦士に…ケシフアちなみにその腕輪…ん？黒？まあいいわ…それは誓約の腕輪…」

私は全く聞いていなかった…というより耳に入らなかったと言うべきかもしれない。

「……お、おお…お姉ちゃん!!」

私はパニックになりながらも、お姉ちゃんの部屋に向かって走り出しました。

「あらら。行っちゃった」

誰もいなくなった部屋で人形は一人？呟いた。

私はお姉ちゃんの部屋に飛び込んだがお姉ちゃんはまだ寝ているようだった。

「起きて！お、お姉ちゃん！ぬいぐるみがぬいぐるみが！昨日の」

「…ん？美雪…どうしたの？朝から騒がし…え？ちよ、どうしたの」

！？その髪色！？」

「か、髪色？そんなことより人形が…」

「そんなことじゃないでしょ！？巫女は黒髪でいなきゃダメなのよ！？」

お姉ちゃんの部屋にあった鏡に私の姿がうつった。

「え？あれ？緑色…な、なんでえー！？」

「と、とにかく落ち着いて美雪。話はそれから…ね？」

とパニックかつ混乱の中、朝から騒がしくなったがぬいぐるみが喋りだしたことをお姉ちゃんに話した。

「ふうん。ぬいぐるみが喋る…ね、普通ならありえないと思うけど昨日ぬいぐるみから妙な力を感じたけどまさか喋るとはね。とりあえずぬいぐるみに話を聞きましょう。美雪の部屋に行くわよ」

「う、うん…」

さっきまでは取り乱してたけどやっぱりお姉ちゃんといると落ち着く。

私達は私の部屋に向かった。

第三話『野々村吹雪の尋問』

「……………」

「…あれ？喋らない…」

「…無関係の人の前では黙ってるみたいね…でも」

お姉ちゃんは愛刀である氷桜を喋る？ぬいぐるみに突き付け…

「喋らないと斬るわよ？」

ゾクツ…とんでもない威圧感と殺気が充満する。

やはり野々村家の退魔巫女トップクラスの実力者から放たれる殺気は凄い…私に向けられているわけでもないのに少しゾクツとくる。

「じゃ…喋ればいいんでしょ喋れば…だから斬らないで」

さすがにこの殺気を直に受けているぬいぐるみはふるえながら喋りだした。

ぬいぐるみでも殺気は効くらしい。

「で…どういうことなの？キモぬいぐるみさん？」

「キモぬいぐるみは酷いわ…私にはクビキリキツネという名前が…」

私は黙っていたほうがいいかな…多分。

聞き出すのはお姉ちゃんに任せよう。

「クビキリキツネさん？でケンプファーってなに？ドイツ語で戦士やら闘士とかの意味だけど…？嘘言ったら斬るのでそのつもりで」

「そうよ…ケンプファーは戦う者…そしてその美雪さんの腕輪…それは誓約の腕輪。その腕輪によって力が保証されるのよ。その力で戦い、その姿…ケンプファーの状態…とでもいうのかしら…力を発揮するときの姿よ」

「ふーん…力のブーストをかける物って感じていいのね…で誰と戦うのよ？」

「それは色が違うケンプファーよ…本来は赤と青のハズなんだけど…美雪さんのは黒…よね？こればかりは私にもわからないわ」

「ほんと？…うん…嘘は言っていないみたいね…イレギュラーってところなのかしら？」

ここでお姉ちゃんの殺気が散漫した。

それだけでなんか場の空気が随分軽くなったような気がする。

「あ、あの私…わけもわからず戦いたくないんだけど…それに巫女は一般人に力を振るって…やっちゃダメって教えだし…」

私はもちろん戦いたくなんてないのでここは正直に言ってみる。

「でもケンプファーは…戦うもの…いえ…なんでもない、吹雪さん

睨まないでよ」

「ふう…まあ仕方ないわ…巻き込まれた以上、こちらからやりたくないけども向こうから来る可能性もあるんでしょ？私が美雪を護る…護ってみせるわ」

お姉ちゃん…やっぱり優しい…

側にいてくれるだけで安心できる。

だからこそ甘えてしまう。

「ケンプファー相手にケンプファーの加護がない一般人が勝てるわけ…」

クビキリキツネさんがボソリと言うが…

「ふふふ…野々村の巫女をナメないことね…」

聞き逃す事なくお姉ちゃんは黒い不敵な笑みを浮かべていた。

「あ、もうこんな時間だ…ご飯は作っている時間とかは…ないね」

「みたいね…仕方ないわ…今日は朝ごはん抜きで我慢するしかないわね」

「う、うん…あ、クビキリキツネさんは留守番しといてね」

「わかったわ」

といふような事がありつつも普通に星鐵学院に向かうことになりました。

第四話『襲来！青のケンプファー』

私とお姉ちゃんは用事などが無い限りはいつも一緒に登校している。さりげなく出発前に髪の色が戻ってよかった。

あともちろん下校も一緒なのは言わなくてもわかるかな？

「（にしてもなんかお姉ちゃん…なんかピリピリしてるなあ…周りを警戒しているというか…あの目は仕事をするときの目）」

「……………」

いつもは話しながら登校するのに今日はあまり話さずとても静か…。

「大丈夫だって。朝からいきなり来るなんてことはさすがに無いと思うし、警戒しすぎだよ？」

いつもの楽しい雰囲気が好きだった私はお姉ちゃんに明るく話しかけた。

こんな雰囲気は仕事の時だけでいい。

「うーん…そうね。朝だし…」

と警戒が少し緩んだかと思っただ瞬間…

「美雪さがつて！…！」

「きや…」

急にお姉ちゃんが左前のほうに出て私を後ろに下げた。

「よお…お前らケンプファーだろ？」

と赤髪の女が銃をわたしに向けながらそう言った。

その女の後ろには青い髪の女の子が控えているが…すこし気乗りしないような表情だ。

「ちよつとまつてよ…じゅ…銃…日本だよ…」

私は銃なんてみたことなくパニックになってしまっ…背中冷汗が異常だ。

「これは私の武器だ…これでお前らに風穴開けてやるから覚悟しろ」

「貴女…それ本気？…本気で私たちを…」

お姉ちゃんが一言つぶやいた

「…」

青髪の女の子は無言だが赤髪の女の子はかなり好戦的らしい。

「あたりめえだろ？じゃあ死にな」

と赤髪の女の子が言った瞬間、銃が火を噴いたがお姉ちゃんが私を引つ張られるように少し後ろにさがり回避する。

その瞬間私の髪の色が緑色に変化した…朝と同様ケンプファーになったのだろう。

「ほらみる…やっぱりお前もケンプファーだったな!!」

「…確かに美雪はケンプファーとかいうわけのわからないものに巻き込まれたけど私はケンプファーじゃないのよ赤い猛犬さん。それなのに私も狙う気？まあどっちにしろ大事な妹を見捨てるわけにはいかないし、こんな危ないことはやめない？」

「見怒っているようには聞こえない声で話しているがこれは確認いや…」

お姉ちゃん最終警告だ。

「やめるかクソ馬鹿が。遠回しな言いかたで命ごいか？ここにいるお前が悪い。まとめて殺つてやる」

「そう…それが答えね…よくわかったわ…」

そういつてお姉ちゃんは…

4つの札を4方向に投げ、そのあとまた別の札を自分の下に投げつけた瞬間ポワンという音がしてお姉ちゃん自身を煙で包んだ。

「な、なんだ!?!」

「!?!?!」

赤い髪と青い髪の女の子は少し警戒したようだが自分たちには影響はないとわかつたらしく動かなかった。

「…さて…美雪を倒したいなら…先に私を倒してみれば？」

煙がはれた瞬間…お姉ちゃんは…巫女服になっており…右手には氷刀氷桜が握られている。

野々村家の退魔巫女…魔を狩るときの戦衣装になっていた。

第五話『氷巫女 野々村吹雪』

「美雪さがって……」

「う、うん。ゴメンねお姉ちゃん」

私はお姉ちゃんの言うとおりに後ろに退避した。

S i d e 吹雪

「ああん？上等だ！このコスプレ女が！さっさと殺って次に行くぞ
ナツル！」

と銃を連写してくる赤髪の女。

避けられるのは避け避けきれないのは刀で叩き落とす。

まさにストレートな攻撃しかしてこない。

「単調な攻撃ね…ん？」

青髪の女…ナツルというらしいが左手からぎこちなく炎の火球を放
ってきた。

「はっ！」

あの炎の撃ち方…ぎこちないし明かに戦い慣れしてない…なんかノ
ーコンだし。

ケンプファー能力と運動能力アップしただけってとこね。

私はその火球に炎封札を投げつけ相殺。

「打ち消されたんだあの紙切れ!？」

ナツル…がここに来て声を上げた。

まあケンプファーを一般人…と言っていいのかわからないけど…退魔札を知っている人は少ないだろう。

「ちっ…この役立たず!…にてもこいつ…ケンプファーでもないとしたら何モンだ…ただのコスプレ女じゃなさそうだ」

そして赤髪はナツルを殴ってからまたこちらに連続射撃…先程と同じように攻撃を捌く。

成る程…赤髪が連続攻撃、ナツルが火力…と判断してもよさそうね…そろそろ。

「さてこちらから行くわ…」

相手は銃と魔法系…なら私は接近しようと試みる…が

「…ちっ」

流石に相手も馬鹿ではないらしい。

相手は距離をとりながら銃に火球の攻撃。

相手が接近が弱いというわけではないのかもしれないがこちらには刀。

単調だが私の間合いに入らない事…まあ悪くはない。

「…（さすがに接近戦はやすやすとさせてくれないわね…なら）」

即席で結界札を私の周りに張る。

あくまで即席すぐに効果きれてしまうが…すこしの間でいいのだ。

これで銃、火球の軌道を逸らせる…そして私はある構えを取る。

「…ヒョウトウヒョウザクライチ氷刀氷桜…式の太刀…はあ！」

人一人くらいなら簡単に引き裂くような氷の刃を鋭く放つ。

「ちよつ…そんなのアリかよ!？」

狙いはナツル…いや…本当の狙いは…

「氷には炎だ！」

「おい、ちよつと待てナツ…」

赤髪は何かに気づいたらしくナツルに伝えようとしたようだ…ナツルは氷の刃…に火球を当てて…相殺し…瞬間…そこまで大きくな
いが水蒸気爆発。

私は防壁札でガードし、自分へくる威力を軽減する。

「ぐっ…いつてえ…」

「ツつう…この馬鹿が…熱と冷気をぶつけりゃこつなる事ぐらい分かれ……なっ！」

ナツルと赤髪は壁に叩きつけられたようで私はその隙をつき…

「…チエツクメイトよ赤い猛犬さん？」

私は先に無力化するべき相手赤髪の女に刀を首に突き付けた。

第六話『決着　そして黒い影』

Side 吹雪

「あ、紅音！」

「おっと動かないでね？ナツルさん？怪しい動きしたら容赦なく斬るわよ？」

「くっ…」

ナツルが駆け寄ろうとするがさせるわけがない赤髪の女…紅音というらしい…。

紅音に刀を押し付けて威圧しついでに麻痺札を紅音に発動させた。

「ナツル！私に構わず奴を打ち抜け！」

「で、出来るわけないだろ！」

刀を突き付けられた状態で自分を構わずと言ってくるとはいい度胸をしている。

がナツルにその度胸…いや…見捨てるという選択肢はなさそうだ。

「ま、美雪を殺しにきたんだし斬られても文句言えないよね？」

「ちっ…力が入らねえ…ここまでか…」

「紅音ー！」

そして私は刀を振るおうと…

「お、お姉ちゃん…もういいよ…」

美雪が近寄ってきた。

「美雪…？こいつらは私達を殺しにきたのよ？それ相応の…」

「もういいってば！」

「ちよ！？」

美雪が声を張り上げて私を抱き着くように止めてきた。

その弾みで後ろに後退し集中がきれ麻痺札の効果がきれ紅音への刀の間合いから外れてしまった。

その隙にナツルは紅音の元に駆け付け様子を伺っている。

紅音はすぐに撃とうとしていたが今はナツルが止めさせているようだ。

「私を庇って戦ってくれたのは嬉しいけど……でも、私はお姉ちゃんを殺すところなんて見たくないよ…」

美雪は泣いて私に抱き着くように止めていた。

「…もう…わかったわよ」

相変わらず美雪は甘い。

けど優しい…こんな性格な美雪が私は好きだ。

だからこそ私は美雪を護らなくてはいけない。

本来美雪は巫女の仕事も向いていないんだろなあ。

そして私は刀を鞘に納める。

美雪が人を殺す私を見たくないように私だって美雪の泣き顔など見ていたくないからだ。

「うん…お姉ちゃん…ぐすっ…」

全く美雪は…ふふっ。

「…だが…紅音とナツル…だっけ？…次また美雪に手を出すようなら…覚悟してよね？」

「あ、ああ…」

「ちっ……………」

とりあえず二人は一応納得？したようだ。

このまま登校…出来る雰囲気じゃない美雪を連れて私は一回家に引き上げることにした。

S i d e ? ? ?

野々村の巫女が黒巫女以外の対人戦とは珍しいな…。

ちやっかり周りに認識されないように結界はっているし抜け目ないところはずが氷巫女の吹雪といったところか…。

今に見てるよ…吹雪…美雪…まずはお前らだ。

さりげなく屋根の上に…上が黒、下が青の巫女服を身に纏う女がいたとかいないとか…。

第七話『姉妹の絆』

Side 美雪

私達は家に戻ってきてお姉ちゃんの部屋にいる。

使用人さんが少し心配してきたが問題ないとお姉ちゃんがごまかしてくれた。

高校休んでしまったカタチになっちゃったけど今まで休まなかったし一日くらいいいよね。

「お姉ちゃん…ごめんね…巻き込んだ…形になっちゃって…しかも無理矢理止める形に…」

私はしゅんとしながら謝った。

なんとなく謝らないといけない気がしたから…。

「…なんで謝るの？…私のほうが…謝るべきじゃ…」

「ううん…謝るのは私。戦うべきだったのはケンプファーになった私だし、代わりに戦ってもらいながら最後止めたし…本当はわかっているの…殺^ヤりにきた相手に情けをかけるといずれ足を掬われるときもあるって…でも…はっ…」

急にお姉ちゃんに抱きしめられ、頭を撫でられた。

暖かい温もりが凄く心地好い。

「もう…美雪は美雪のままでもいいのよ。気にしないで、ね？」
ウィンクしながら優しく声をかけてくるお姉ちゃん。

優しい暖かさを感じながら私は少しの間そのまま過ごした。

しばらくして落ち着いてきた私は…。

「よ、よし…。今度戦うときは私も戦う。さすがに…頼りっぱなしはマズイもん」

「そっか…私も出来る限りは助けるわ。ほってけないもの」

「うん。お姉ちゃん頼りにしちゃうね」

「ふふん。氷巫女の私にまっかせなさい」

胸をはってお姉ちゃんは微笑えんだ。

そしてそのタイミングで使用人が私達の部屋にやってきた。

「失礼します。吹雪様、お母様からお電話です」

「ん？進展があつたのかしら？今いくわ。美雪待っててね」

「うん、わかった」

私はお姉ちゃんを見送った。

第8話 『母の仕事、そしてケンプファー考察』

Side 吹雪

「もしもし？お母さん？」

受話器越しに話しかける。

『吹雪ね。こちらの仕事はまだかかりそうで、まだ戻れないわ。ゴメンね』

「そっか。大変そうね……私達も手伝いにいこうか？」

お母さん達が苦戦する。

そんなことは滅多にないので私達もいこうかと提案したが……

『大丈夫よ。ただ数が多いだけだから。そっちは何か問題はない？』

「……………問題ないわ」

私は少し例の件……ケンプファーとかいうふざけた一件が頭に過ぎったが、両親に迷惑をかけてはいけないと判断し言わない事にした。

『ん？……まあ、そうならいいんだけど、何かあったら言ってね？』

「わかってるって。んじゃなんかあったらこちらからも連絡するわ」

通話終了……さすがお母さん……私が少し考えた事感づいたかもね。

「さて…美雪と合流しますか」

と私は美雪が待つ私の部屋に戻った。

「あ、お姉ちゃん。なにか進展あったの？」

可愛らしく首を傾げながら質問してくる妹。

うん、可愛い、美雪は私が絶対守る。

「いや、進んではいるみたいだけど、数が多くてまだ帰ってこれないってさ」

「そっか…なら私達は私達で頑張らないと」

「そうね。変な一件もあるし…そういえばケンプファーって何故なつたの？やはりあのぬいぐるみが…ん…それ以外に変化は？」

流石にぬいぐるみが話す…以外にもなにかあったのだろう。

いきなりケンプファー？だかなんだか良くわからないが変身だからさるんだしぬいぐるみ以外に何かしらキーになるものがあったもおかしい。

「あ…そういえば…コレ」

そう言っつて美雪は手首を見せてくる。

「…？繋ぎ目がない黒いブレスレット？」

「うん…そういえば変身？するとき光った…いや黒だから光ったと
いうのは変なのかもしれないけど…変化があった気がする」

「…うむむ…とはいえやっぱりわからないわね…仕方ないあのキモ
ぬいぐるみをシメあげ…いや聞くしかないわね…美雪の部屋に行く
わよ」

「し、シメ？ちょっと…ま、待ってよう」

考えても結論がでないため私達は…あのぬいぐるみがある美雪の部
屋に向かった。

じっくり聞きださないとね…ふふふ。

第8話 『母の仕事、そしてケンプファー考察』 (後書き)

むう、就職活動が忙しくて更新がほとんどできない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1708t/>

けんぷファー～白き巫女と黒き巫女～

2011年9月21日00時13分発行